

## あとがき

本書は著者が2010年から2017年の間に執筆してきた論文等を再構成したものである。重複する部分を削除し、一部加筆するなどの修正を行っている。また、一部において、初出時のタイトルを若干修正しているが、各章の初出を示すと以下のようである。

序 章：書き下ろし

第1章：「子どもの貧困と母親の就業」埋橋孝文・矢野裕俊編（2015）『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅠ』ミネルヴァ書房。

第2章：「隠れる女性の見えない貧困」橘木俊詔編（2012）『格差社会』ミネルヴァ書房。

補 論：「(翻訳) 子どもの貧困と女性の貧困との相互関連」(2017)『帝塚山学院大学人間科学部研究年報』第19号。

第3章：「大学から仕事への移行期にある若者たちの経済的困難」埋橋孝文・大塩まゆみ・居神浩（2015）『子どもの貧困／不利／困難を考えるⅡ』ミネルヴァ書房。

第4章：「寸断化される職業歴—京都若者サポートステーションアンケート調査による大卒者」埋橋孝文（研究代表）(2014)『科研費報告書 貧困に対する子どものコンピテンシーをはぐくむ福祉・教育プログラム開発』（第3部）（タイトルを変更）。

第5章：「生活困窮世帯における家計管理の困難」(2016)『帝塚山学院大学人間科学部研究年報』第18号（タイトルを変更）。

第6章：「生活保護世帯の家計・生活構造—母子世帯を中心に」埋橋孝文編（2013）『福祉+αシリーズ4 生活保護』ミネルヴァ書房。

第7章：「高齢期の貧困とジェンダー」木本喜美子・大森真紀・室住眞麻子編（2010）『講座 現代の社会政策 第4巻 社会政策のなかのジェンダー』明石書店。

各章の初出を見ると明らかなように、この10年近くの私の研究は、諸先生方との共同によって進められてきた。諸先生方からのお誘いと導きがなければ、取り組むことのできなかつた課題である。木本喜美子先生、大森真紀先生、橋本俊詔先生、埋橋孝文先生、矢野裕俊先生、大塩まゆみ先生、居神浩先生をはじめ諸先生方にお礼を申し上げる。

専任教員としてはかなり遅くに出発した私も、近くに定年退職を迎える。退職が近づくにしたがって、「最後のまとめ」をしなればという思いが強くなり、準備不足を顧みずに、また「最後のまとめ」が「まとめ」にならないのではないかという不安をもちながら著書の刊行を思い至ったしだいである。

最初の著書からおつきあい下さり、今回も私の思いを聞いていただき、かつ原稿をいち早く読んでいただき、出版を快諾下さった、法律文化社の田麿純子氏に厚くお礼を申し上げる。また、丁寧な編集を行って下さった徳田真紀氏にお礼を申し上げる。

田麿氏から指摘されたことの1つに、貧困研究と私との関わりについて言及するということがあげられていた。いままで受けてこなかつたご指摘なのでお応えすべく振り返って考えてみたが、真正面からお応えすることは難しい。私の最初の著書（『世代・ジェンダー関係からみた家計』2000年、法律文化社）の「あとかぎ」で「低所得世帯の家計管理問題および世帯内の収入配分」問題に関心をもったきっかけについて簡単ではあるが、述べさせてもらっている。こうしたことから、ここでは研究者の卵として出発した頃の経験を簡単に述べることでご容赦いただきたい。

貧困研究と私との関わりは断続的なものである。貧困研究との出会いは、生活保護世帯における「サラ金問題」の実態について調べるために、大阪府下のある福祉事務所で実習をさせてもらった1982年である。通常よりも遅くに大学院に入学し、大学院修士課程を出たばかりのときである。この当時、「サラ金問題」は法外な高金利の貸付と暴力的な取立て行為などで社会問題化してい

た。大学院で指導を受けていた岩田正美先生のつながりで福祉事務所の実習が実現し、とにかく貧困・低所得世帯がなぜ高利の借金をするのか（しなければならぬのか）、その借金の理由は何か、その借金の結果どうなったのかなどについて明らかにしたいという思いだけで飛び込んだ実習であった。実習期間は1カ月間におよび、生活保護ケースワーカーの方々の勤務時間と同様に私も出勤し、ケースワーカーが家庭訪問を行う際には、一緒に訪問させてもらい、生活保護世帯のご了解の下に、ケースワーカーの横で話を聞かせてもらい、ケースワーカーが残業される場合は私も残って資料を見させてもらうという作業を続けた。

こうした実習は、生活保護ケースワーカーの仕事という観点からも、資料を通じて見えてきた貧困・低所得層の家計問題という点からも忘れることのできない貴重な体験であった。大層な言い方をお許しいただきたいが、このような福祉事務所での実習体験は、断続的とはいえ、貧困研究を続ける上での私の土台となり、研究のみなもととなったことは間違いない。

本書の出版にあたっては、帝塚山学院大学出版助成金をいただいた。記してお礼を申し上げる。

最後に、私ごとで恐縮であるが、今夏のはじめに体調不良に陥り、主治医による治療と夫の看護を受けて何とか入院せずに回復することができた。いつもそばで支えてくれる夫に感謝したい。

2018年盛夏 室住眞麻子